



伝統・文化教育に関わる造形活動の拡張的学習としての可能性についての研究：  
空き缶和太鼓づくりを事例として

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 北海道教育大学 公開日: 2015-12-22 キーワード: 作成者: 橋本, 忠和 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.32150/00006360">https://doi.org/10.32150/00006360</a>

# 伝統・文化教育に関わる造形活動の 拡張的学習としての可能性についての研究

— 空き缶和太鼓づくりを事例として —

橋本 忠和

北海道教育大学函館校美術教育研究室

## Research on the Possibilities of Expansive Learning of the Artistic Activities for Traditional Culture Education

— The Case of the making of “Wadaiko-drum” by recycling an empty can. —

HASHIMOTO Tadakazu

Department of Art Education, Hakodate Campus, Hokkaido University of Education

### 概 要

現在、教育現場ではグローバル化する社会の中で自国の伝統や文化と理解を深め、尊重する態度を身につける「伝統や文化に関する教育の充実」が、国語科や社会科のみならず、美術教育等における表現・鑑賞学習においても求められている。しかし、教科の時間が減少する中で実施数や実施内容は、その活動のねらいの設定や地域や教員間の連携が不十分で充実した学習活動とはなっていないように思われる。

本研究では、この課題を解決する手がかりとして孤立した学びの拡張を促進し、「学びのネットワーク」を形成するとされる「拡張的学習」の理論に着目した。そして兵庫県姫路市小学校6年の「空き缶和太鼓づくり」の実践事例を研究対象に、その理論と伝統・文化教育に関わる造形活動との接点を考察することにした。

すると、児童・教師・教科・地域住民・産業等をネットワーク化させた伝統・文化教育に関わる造形活動は、児童達の伝統や文化と理解と活動へのモチベーションを向上させる媒介＝「集団的道具」となり、その学びを拡張させる「拡張的学習」の役割を果たす可能性を有していることを見いだすことができた。

## 1 はじめに

2007年に示された中央教育審議会の「審議のまとめ」の教育内容に関する主な改善事項において「伝統や文化に関する教育の充実」があげられ、グローバル化する社会の中で自国の伝統や文化と理解を深め、尊重する態度を身につけることが重要とされている。さらに、「図画工作科、美術科では、唱歌や民謡、郷土に伝わる歌、和楽器、我が国の美術文化などについての指導を充実し、これらの継承と創造への関心を高めることが重要である」<sup>1)</sup>と上記の伝統・文化教育充実の為に美術教育では、表現や鑑賞を通した学びに注目されてきた。

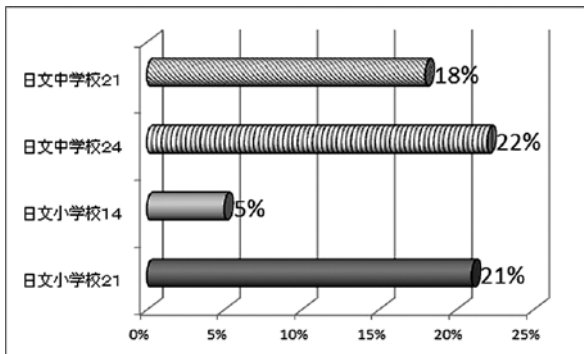


図1 改訂前後の教科書での掲載状況<sup>2)</sup>

図1は学習指導要領改訂前後における姫路市で使われている教科書（日本文教出版）における伝統・文化に関わる作家の作品数を示している。

中学において平成10年度改訂から日本の伝統・文化作品を鑑賞等に導入を示され、その掲載数(平成21年度版)が18%と多くなったが、今回改訂(平成24年度版)を機にさらにその扱いが22%と大きくなっている。特に増えているのが小学校で以前(平成14年度版)は5%だったのが最新(平成21年度版)では21%に増えている。また、さらに、小中とも教科書では、日本各地における伝統的な行事や道具(職人)などを数多く紹介している。

これは改訂小学校学習指導要領において、高学年の鑑賞の中に「自分たちの作品、我が国や諸外国の親しみのある美術作品、暮らしの中の作品などを鑑賞して、よさや美しさを感じ取ること」<sup>3)</sup>

と一文が入っているの、それに対応したものと考えられる。

しかしながら、新学習指導要領が教育課程全体を通じて我が国の郷土の伝統や文化を受け止め、そのよさを継承・発展させる教育内容の充実を求めている一方で、国立教育政策研究の「我が国の伝統文化を尊重する教育に関する実践モデル事業(2008年)」のモデル校(小学校49・中学校28校)の題材・教育課程等を分析した安野功の研究によると、題材に関して以下の傾向や課題が指摘されている(図2)。

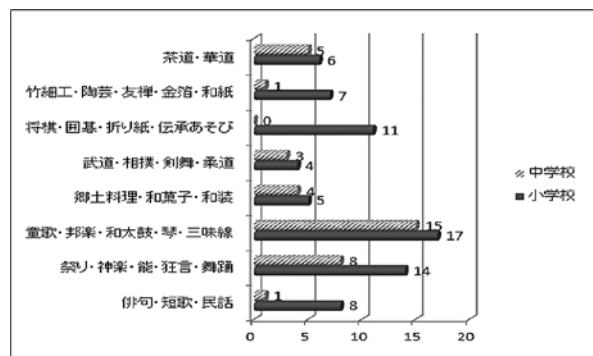


図2 モデル事業で実施された主な題材<sup>4)</sup>

- ・小中とも「伝統音楽」と「祭りや郷土芸能」の題材の割合が高い。
- ・「昔からの遊び」「伝統工芸」などについては小学校で扱われる割合が高く、中学校ではごくわずかである。
- ・中学校では「伝統的な言語文化」に関する題材があまり扱われない。<sup>5)</sup>

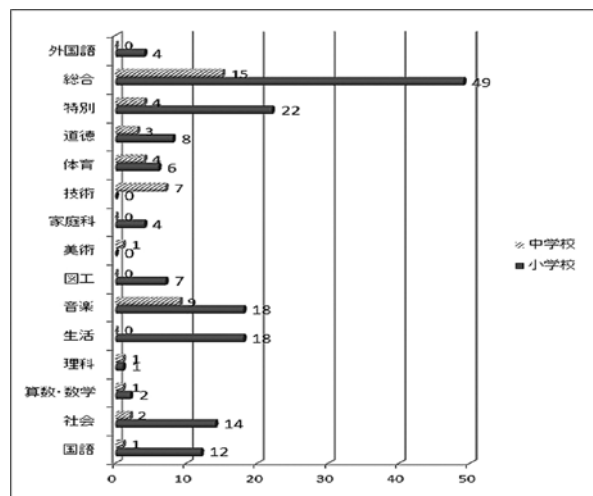


図3 教育課程の題材の位置づけ<sup>6)</sup>

また、各教科の題材の位置づけの分布についても以下の傾向や課題を指摘している。

- ・「総合的な学習」と「音楽」は小中ともに高い割合を示している。
- ・「国語・社会・図工（美術）」については小学校で扱われる割合が高く、中学校ではごくわずかである。<sup>7)</sup>

この指摘にあるように「モデル校」の実践は「音楽や舞踊」が多く、特に中学校では「伝統工芸」等の造形活動が行われていない。また、中学校では国語・社会・美術などにおいて、学習指導要領改善の趣旨を反映した実践内容が展開されず、教科や実践にかたよりが見られる。

一方、小学校においても生活科・総合的な学習や音楽の時数に比べ、図画工作科での時数は少ない。その要因としては、舞踊・和太鼓・邦楽などの継続的に取り組む芸能に比べ、造形活動では竹とんぼ作り等の工芸を地域の指導者から一方的に学ぶ単発的な活動になっていること、さらには芸能と造形活動との連携が十分でないことなどが推察できる。

伝統・文化教育の具体化する際に陥りやすい要因と解決への視点を梶田叡一が指摘している。

- ・思いつきの趣味的な活動が少なからずみられる。「何のために」がほしい。その活動を教育の中に取り入れることによって子ども達にどのように学びや育ちを期待するのかといった想定である。
- ・日本の伝統文化に着目した活動を展開する場合、指導者の頭の片隅「市民族中心主義」と「回顧主義」への警戒の念に常にあってほしい。「日本で古くからやられてきたことは何であってもすばらしい」といった懐古趣味的な視野狭窄は困ったものである。<sup>8)</sup>

梶田が指摘するのは、指導する教師の学習活動を構想する際の留意事項と考えられる。すなわち、

伝統・文化教育の内容が充実の取り組みが一般教員まで広がらない要因として、その教育で得られる学びの成果や、その学びを生む学習活動の構造を学習理論の視点から可視化する取り組みが不十分だったことが考えられる。それゆえ、校内で一部の芸事等に通じた先生がクラス・学年単位で実施し、他教員の多様な経験が生かされない「学びの孤立」状態に陥っているのではないかとと思われる。

すなわち、学習活動としての構造やねらいが曖昧なままの孤立した学びの状態では、結局、この教育が一時的な流行に終わってしまい、日本の学校教育のあり方に、さらには将来を担う日本人としての精神構造に土台を子ども達に形成するものとはならないと危惧される。

そこで、この「学びの孤立」を解決する手がかりとして、子どもの学びの拡張を促進し、学校の制度的境界を越境した「学びのネットワーク」を形成するとされる「拡張的学習」の理論に着目した。

そして、子どもが主体的に創造力を発揮する造形活動に焦点を当てながら、教科や領域を横断する伝統・文化教育の学習活動システムのあり方や成果を捉え直す必要があると考える。また、従来から学校での地域の伝統・文化の学習活動を支援している個人や諸団体等を便利な補助手段と考えるだけでなく、相互に関連した存在として「学びのネットワーク」の中に位置づける必要があると思われる。

この観点に立ち、本稿では「拡張的学習」の視点で、兵庫県姫路市立安富北小学校6年でおこなった「空き缶和太鼓づくり」を活動内容の作品や活動後のアンケートを分析する。したがって、本研究は伝統・文化教育に関わる造形活動の活動経過・内容を検証対象とし、それらが「学びのネットワーク」を形成し、「拡張的学習」としての可能性を有しているのかどうかの考察を行ったものである。

## 2 拡張的学習とは

活動理論を研究するユーリア・エンゲストロームは拡張的学習について次のように説明している。

拡張的学習は伝統的な学校教科書、発見の文脈、実践的応用の間の関係づけを含め、学習対象を拡張することによってカプセル化された学校学習の打破を提案する。したがって、そこでは学校学習の活動そのものの転換が内部から行われていくのだ。<sup>9)</sup>

現在、学力向上や安全上の危機対応に迫られる多忙の中で教員が教科の授業を割いて他教員・住民・組織等と連携する意義と手だてが見出しにくく、伝統・文化教育は「芸事が得意な先生がやればいい」と教師の取り組みや子どもの学びが「孤立＝カプセル化」状態に陥っている伝統・文化教育にとって、拡張的学習は「学びのカプセル化」を打破するきっかけを与えられ考えられる。

そして、エンゲストロームは、下記のようにヴィゴツキーの「最近接発達領域」に着目し、学びを拡張する手だてを集团的活動に求めた。

ヴィゴツキーによれば最近接発達領域は『明日には成熟するが今日は胚の状態』、すなわち発達の「つぼみ」といえる機能を指している。(略) 人間の子どもは「自分の発達の限界を超えて進む」ことができ、「集团的な活動の中でよりいっそう多くのことを行うことができる」<sup>10)</sup>

さらに、集团的活動の協働的・実践的な「活動」を表現するために、ヴィゴツキーの行動主義心理学における(刺激-反応)の2項図式を超えて「主体-媒介手段-対象」の3要素「主体」・「対象」、それらを媒介する「人工物」からなる3項図式を参考に図4の「活動システム」の構造化を示している。<sup>11)</sup>

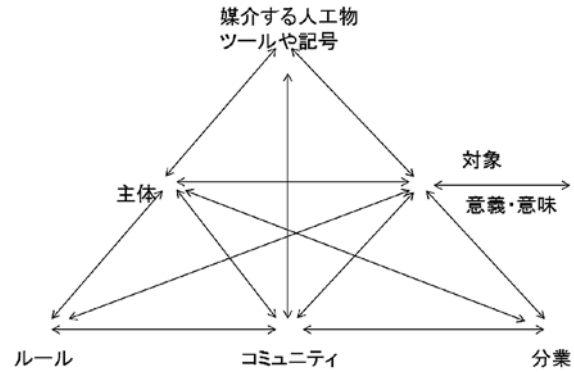


図4 集团的活動システムのモデル<sup>12)</sup>

この「活動的活動システム」の構造と各要素の関係についてエンゲストロームの活動理論を研究している山住勝広は下記のように分析・整理している。

- ・モデルは個人を単位にした刺激と反応の図式ではなく、人間の協働的・実践的な「活動」を表現するものである。ここで、「主体」（個人・チーム）と「対象」と「コミュニティ」との間でつくりだされ、互いに媒介し合っている逆三角形が活動システムの基本関係となる
- ・上部の小三角形は「主体」とその諸行為の「対象」との関係が「人工物」に媒介されている。
- ・「対象」とは活動システムを特徴づける決定的に重要な要因である。活動システムにおける「対象」は、人々の協働の社会的実践活動が働きかけていく「素材」や「問題」である。そこでは、活動を通して諸個人が「意義」や「意味」を生成する。
- ・「主体」が「対象」に働きかける時、それを媒介する道具や手段となるのが「人工物」である。活動は何らかの物質的な道具や資源、テクノロジー、象徴的記号、言葉、コンセプト、アイデア、モデル、ヴィジョン、理論等を手段とし、そのような「人工物」に媒介されて実現する。
- ・「ルール」は社会的な規則や規範、統御や慣習として「主体」と「コミュニティ」との関係を媒介する。それは、活動システムの内部

で、諸個人の行為や相互作用を制約するものである。

- ・「コミュニティ」は活動システムに加わっている諸個人のグループであり、「対象」の共有によって特徴づけられる。
- ・「分業」は活動システム内の知識や課題や作業の水平的な分配、及び権力や地位の垂直的な分配のことである。それは「コミュニティ」のメンバーと共有された「対象」との関係を媒介している。<sup>13)</sup>

エンゲストロームが「このモデルは活動の三角構造の中の多数の関係の分析可能性を示している」<sup>14)</sup>と述べているように、この「集团的活動システム」は活動の分析単位として、多様な組織や仕事の活動を分析するための概念モデルとして活用できると考えられる。さらに、彼は図5のように学習活動の構造を示している。教師がクラスを個人の共同体とみなし、個々人が興味・関心を示し、且つ、内容伝達の効率がよい教材を選定する。学習者はその管制下で規定の教材と向き合い学習活動を展開していく。そんな個人がばらばらな学習主体として位置づけられている学習活動と学習者が主体として日々の生活（現実世界）に学習対象（課題）を見だし、教師や地域住民等と連携して多様な道具（媒介人工物）、課題解決法を探求的に学ぶ学習活動＝拡張的な学習活動の関係を示している。

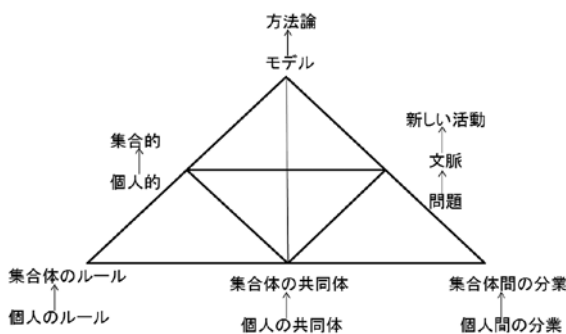


図5 学習活動の構造<sup>15)</sup>

児童が多様な他者と繋がり集团的に活動を展開

していく学習では、成果がオープンエンドの活動も存在し、主体は継続的に課題解決を探求する。活動を三角形下部のルール・コミュニティ・分業といった社会的媒介物が支えることで、学級等の枠にとどまらない学びのネットワークを構築していく。<sup>16)</sup>

この集团的学習についてエンゲストロームは「拡張的学習」として以下のように説明している。

学習活動の本質は、当該の活動の先行的形態の中に潜在している内的矛盾を露呈しているいくつかの行為から、客観的かつ文化—歴史的に社会的な新しい活動の構造(新しい対象、新しい道具などを含む)を生産することである。学習活動は、いくつかの行為群からひとつの新たな活動への拡張を習得することである。<sup>17)</sup>

したがって、拡張的学習は主体に新たな学びへの拡張の仕方を習得させる学習であるといえる。この「拡張する学習」に関して山住勝広は、拡張的学習の特徴を以下の3点に整理している。

- ①拡張的学習は、学習者が学習の必要を生じさせる問題の根源を問い、学習の対象を拡張させる学びである。
- ②拡張的学習は、学習者が与えられた問題の文脈に疑問を持ち、その拘束から脱し、問題の「文脈の文脈」を拡張させる学びである。
- ③拡張的学習は与えられた情報を乗り越え、何か新しいものごとをつくり出す学びである。それは、自らの活動の新しい文化的パターンを創造する。<sup>18)</sup>

以上の記述から「拡張的学習」は、教示主導の完全習得のため学習者が個人として一貫性のない教育内容を機械的に覚えさせられる学習活動を、真の主体者であるべき学習者の生活実態に関連付け、その学習活動が他者とのネットワークを構築する中で活動を拡張するような、学校の学びの文化的パターンの転換と考えられる。したがって、

「拡張的学習」は個々の学習を展開する行為の一方（方法）を示しているのではなく、従来の学習活動システムに潜む矛盾をコミュニティという集団で解決する過程、バラバラの個人の学びから集団的な学習活動への拡張的な活動システムとしてイメージできる。

加えてエンゲストロームは、図5のような単一の活動システムだけではなく、相互に作用し合う複数の活動システムの中のネットワーク・対話・協働を軸とする活動理論への発展を試み、「相互作用しネットワークする活動システム」として図6のようにモデル化した。

山住勝広はこの「相互作用しネットワークする活動システム」を以下のように解説している。

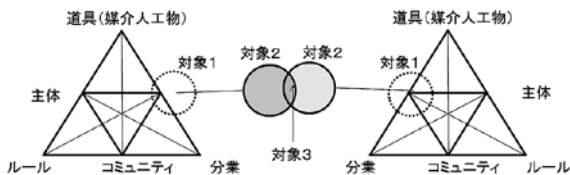


図6 活動が相互作用する活動システムモデル<sup>19)</sup>

対象1から両者の「対話」を通して対象2に拡張し、そして、双方の対象は近づき部分的な重なり合うことになる。この越境的な「交換」において新しい対象3が立ち現れていく。この『第3の対象』は新たな『変革の種子』を生み出していく。つまり、新たに立ち現れてくる「第3の対象」が、それぞれの活動システムへフィードバックされることによって、もとの活動システムを変革していく原動力が生まれる。<sup>20)</sup>

学校の制度的境界を越境した集団的学習活動という多様な他者とのネットワークを一層重視した「相互作用しネットワークする活動システム」の「拡張的学習」の形態は、学習者の学びの拡張を促進すると考えられる。山住勝広は、エンゲストローム「活動システムのモデル」で仕事や教育現場の活動を分析することでもたらされる効果を指

摘する。

人間の集団的活動が生成され構築されるプロセスに対して、そのプロセスに関与する本質的な諸要素をモデルにもとづいて捉え、それらのあいだの諸関係を分析できる。その分析をふまえて活動システムの諸関係のあいだに発生している個々の攪乱・衝突・対立・葛藤・ダブルバインド（二重拘束・ニッチもサッチもいかない状態）など、問題状況をみだし、それを活動の全体的・システムのな「矛盾」として描き出すことができる。<sup>21)</sup>

次節では、現状の伝統・文化教育の学習活動の様相について、小学校における和太鼓の学習活動を稽古論の視点から分析し、「拡張的学習」の視点で見た課題点とその解決への手がかりを見いだす。

### 3 現状の伝統・文化教育活動の分析

エンゲストロームは、学習者の主体性を伴わない集団主義と社会構造で特徴づけられる徒弟制度という中世のシステムの一例として、日本の伝統芸能の特徴を下記のように記している。

日本の伝統芸能は（略）科学的に教えられることは不可能で、弟子たちは師匠の振る舞いを繰り返しまねることによってのみ習得できるとみなされてきた。こうした学びのやりかたを「芸を盗む」と呼ぶことがある。例えば、日本舞踊の入門者が最初にすることは、まさに師匠の踊りの形を真似ることなのである。<sup>22)</sup>

確かに、近代以前の日本の芸能の稽古では、図7のような「模倣」という学習を軸とした学習活動が展開され、西欧の教授論の視点からは学習者の主体的が配慮されていない「模範を示す」という指導形態が支配的だったと見えるかもしれない。

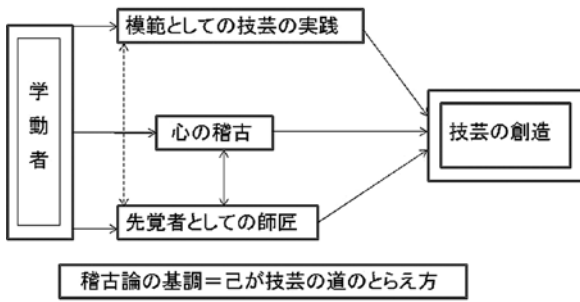


図7 わざ稽古の道筋<sup>23)</sup>

しかし、稽古論を研究する安部崇慶は芸能の教授論には稽古と自己開発としての稽古という2つの意味が内在化し、稽古には師匠達の「教授」と学道者たちの「自己開発」が併存したことを指摘する。<sup>24)</sup>

芸道の芸芸には、演者の感覚や伝承された知恵を頼る部分がきわめて多く、カンやコツといった個の感性の錬磨の部分が多い。従って、芸道の指導とはカンやコツを中心の模倣が軸なる。と同時に、学習者には芸を高めるために自己鍛錬と新たな表現開発の道が、指導者の自ら技を磨く姿から呈示されていると考えられる。

安部崇慶は、学校教育に伝統・文化教育を行う下記の意義を示している。

- ・師匠と学道者との関係性。きわめて緊密な個と個のインターパーソナルな関係を師匠と学道者は結んでいた。
- ・基礎的訓練・鍛錬による技術（型）の習得。
- ・現代の教育、とりわけ学校教育に欠けている点は、厳しい訓練・鍛錬による技術・技能の習得である。個に配慮するあまり、厳しさや激しさともすれば避ける傾向がある。技術のレベルが高ければ高いほどゲームの楽しみや醍醐味は深くなる。
- ・教える者が口うるさく言うのではなく、学ぶ側の「気づき」を大切にする。<sup>25)</sup>

この導入の意義から、芸事には模倣を主としながらも学習者の、自らの未熟さ（矛盾）やその解決法を見いだす「気づき」という主体性を重視す

る指導姿勢があることが分かる。これは拡張的な学習において、活動の躓きから生まれる「内的矛盾」や、それを手がかりに新しい活動の構造を生みだすところに共通点を見いだせる。しがって、伝統・文化の芸能に関わる学習活動も拡張的な学習として機能する可能性があると思われる。

ただ、教師-学習者という芸能の学習形態はどのような課題点があるのか、「相互作用しネットワークする活動システムモデル」を参考に、和太鼓づくりを行う前の和太鼓演奏活動の状況を図8のように整理した。

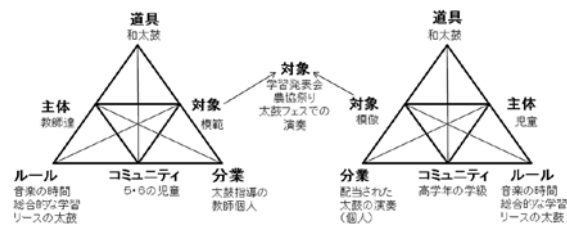


図8 和太鼓演奏活動な児童と教師の学習システム

これまでの和太鼓演奏活動は、優秀な演奏達育成をねらいとしており、練習で友だちと教えあう場面はあるものの、担当する太鼓が違うため児童達は教師の「技」を模倣し個人で学ぶ場面が多かった。また、他の教師は芸事の専門性を反映して関わりにくく、音楽教師は孤立気味であった。

従って、エンゲストロームが「集団活動システムが他の活動システムと相互作用するとき、それが支援的なものであれ発達の潜在力をもつとする」<sup>26)</sup>学習の「最近発達領域」は生まれにくい。そこで、どのような学習活動をこの太鼓演奏に加えることで孤立気味の学びを拡張できるのか探っていた。

すると、和太鼓演奏での音を生み出す革を軸にした学習活動が展開することになった。それは、太鼓の練習中に革が破れたことがきっかけだった。太鼓の革が破れて、その修繕値段を聞いた児童達が、どうして太鼓の革は高価なのか、どう扱えば破れないのか興味を持ったことが学習の始まりとなった。



図9 皮革工場見学（筆者撮影：掲載承諾済み）

すると、清流誇る校区の河川の中流で皮革が生産されていたこと、その生産で全国有数の汚染された河川になったこと、現在では清流へと戻っていることなどが分かった。この情報から革と自分たちが清掃活動等で保全している清流との「関連性」に気づき、自分たちの太鼓演奏や清流に関わる皮革産業を環境保全と郷土学習の視点で学ぶ取り組みがスタートした。

そして、工場見学の際に（図9）手作りで革が生みだされる場面に触発された児童たちが、そこでもらった革片と給食センター等の空き缶を組み合わせ「手作り太鼓」をつくり、さらにオリジナルの曲をその太鼓で演奏したいと提案してきた。

この様子を概観すると、太鼓の革を破いたというダブルバインド状態が演奏活動の「内的矛盾」を生み、それを契機に自分たちの手で太鼓と曲をつくりたいという学びの拡張の動機になったと考えられる。次節以降では「空き缶和太鼓づくり」と和太鼓演奏活動が連携した学習活動の活動内容と成果を整理し、その分析を手がかりに児童達の「拡張的学習」としてどのように機能したのか検証する。

## 4 空き缶和太鼓づくりの活動内容と成果

### 1) 空き缶和太鼓づくりの概要

1-1) 題材名：「地域にひびけ、わたしの手づくり太鼓」

1-2) 教科：主教科 図画工作科

関連教科 総合的な学習の時間・音楽

### 1-3) 学年・児童の実態・学年 6年（7名）

子ども達は水生生物調査をしながら捕獲したホタルの卵を飼育しているため、環境保全への関心は高く、河川清掃等も積極的に行っている。さらに太鼓の音を通して伝統・文化にふれる取り組みとして「富栖子ども太鼓教室」を行っている。

近年、台風の被害等により山や川の荒廃が進み、風倒木等により森に入ることが危険になっている。地域文化の源である自然は児童にとって遠い存在になっていた。地域環境の素晴らしさを再認識させ、播磨地区の伝統材であり、地域の豊富な水を活かしてつくられる革を利用した太鼓づくり、さらに、その太鼓を使ったオリジナルの曲の演奏活動を通して、新たな地域文化を創造する達成感を味わわせたいと考えた。

### 1-4) ねらい

伝統的な美術・工芸品を手本に 絵屏風や和太鼓を制作することで、我が国の生活文化、伝統文化、地域文化に含まれる価値を理解し、文化を継承・発展させる技術、技能を習得するとともに多様な交流によって新たな文化として創造していく。

以下、観点別のねらいを示す。

- ・太鼓の制作を通じて地域の環境と地場産業との関わりに関心をもち、その知恵等を見直すとともに地域の抱える伝統文化・自然環境・産業に関する課題解決や新たな文化発信にむけた方策を考えようとする。（関心・意欲・態度）
- ・皮革に関する調査や工場見学を通じて産業と自らの生活環境との関わりを意識するとともに、太鼓制作における廃材活用から身近な環境の保全のあり方を考えることができる。（思考・判断）
- ・学習を通じて昔の自然を生かす知恵を知り理解する中で地域が抱える課題を見直すことができる。（知識・理解）
- ・和太鼓製作や演奏活動等による校区を超えた交流を通じて、和太鼓という媒体を通じ自分たちの思いを伝えていくことができる。（技能・表現）

### 1-5) 活動過程

1-5-1) オリエンテーション 10月1日1時間

太鼓製作についての学習計画をたてる。そして、

その最終目的を手作り太鼓の曲を地域の方に披露することにした。まず、太鼓と姫路そして、自分たちの地域との関わりを調べることから始めた。

#### 1-5-2) 伝統地場産業の事前調査 10月2日3時間

児童達はインターネットや図書館の資料等を参考に、以下の内容で皮革について調べた。

- ①「播磨（姫路）地域の皮革産業歴史」
- ②「皮革の種類」
- ③「皮革の製造法」

その過程で、自分たちの属する播磨地域に古くから皮革産業が根付いていたことや、皮革には多くの水が必要とされ、自分たちの揖保川の水もそれに活用されていたことを知った。

また、調査の過程で、流域の産業や生活排水ため揖保川が全国でワースト3～5位と不名誉な記録を続けていたことが判明した。しかし、「揖保川流域下水道」による皮革排水の全量受け入れを達成（平成6年・1994）した翌年、近畿地方でベスト2位に躍進したことも分かった。瀬戸内海に注ぐ、兵庫県の代表的な一級河川である揖保川は、生活排水のみならず、皮革等の地場産業からの排水で汚濁がすすんだため、流域住民・産業、行政が連携して河川環境の改善を積極的にすすめてきたことに気づいた。

#### 1-5-3) 中嶋皮革工業所の見学 10月15日2時間

たつの市揖保町の皮革工場へ見学に行った。ここで輸入された皮が、様々な行程を経て、他品種に革に加工されるのを見た。特に驚いたのは、1枚の革を作るのに2tの水を要すること、そして、職人の下記に熟練された知恵・技術だった。

- ・強いアルカリで皮の毛を取る。
- ・湿気を加えて皮をよりやらかくする。
- ・混色は職人の経験による感が大事。
- ・色はエアブラシでつける。
- ・2人の息のあった手作業で革にしわを入れる。
- ・よい革をつくるには、飼育の時から良い餌を多く与える。

#### 1-5-4) 太鼓の製作 10月16・17日 3時間

皮革工場でもらった端の革や家のミルク缶、さ

らに給食センターや介護施設からもらっていた業務用缶詰の容器を活用して、和太鼓を製作した。



図10 太鼓の製作（筆者撮影：掲載承諾済み）

- ①材料：牛の皮2枚・空き缶・紐・木の棒
- ②道具：タオル・軍手・かなづち・穴あけポンチ・新聞紙・缶切り・布やすり・紙やすり
- ③太鼓の作りの手順

- ・革をひと晩水につける。
- ・1枚の皮に12カ所穴をあける。
- ・缶切りでブリキの底を切り抜く。
- ・ブリキの胴の両端に皮を当てる。
- ・ひもの片側を結んでから、鼓状になるように両側の皮の穴に交互にひもを通していく。
- ・ひもの緩みをしめていき、結んで留める。
- ・3日ほど日陰で乾燥。
- ・ばちは、両端を布やすりで削って丸くする。

#### 1-5-5) 手作り和太鼓を使った練習

（10月下旬から、音楽の時間等で）

夏休みから、音楽科教師の指導により練習していた和太鼓の練習に空き缶和太鼓を取り入れた。そして、各太鼓の音の違いを利用して、校区にある鉾山の中のしずくが落ちる音のイメージをもとに、洞窟中にある山の主がうごめく様子の表現をめざした。それは、本校区が以前、は地域経済的に潤っていたが今はゴミの不法投棄現場になっている金鉾山の魅力を水琴窟の音を参考に太鼓の響

きで表現しようというねらいがあった。



図11 和太鼓練習風景 (筆者撮影：掲載承諾済み)

1-5-6) 各地の演奏会に参加。

10月18日の本校学習発表会での演奏以降、以下の場所で演奏をおこなう。

- ・12月1日・姫路市小学校演奏会 (姫路市)
- ・2月24日・和太鼓演奏フェスティバル(山崎町)



図12 和太鼓演奏 (筆者撮影：掲載承諾済み)

1-5-7) 版画制作による学習の振り返り (7時間)

3学期には2年間の太鼓練習をふりかえって、演奏の様子を版画に描いた。

## 2) 空き缶和太鼓づくりの成果

2-1) 他者と協調 (和) を学ぶ

集団演技である和太鼓で水琴窟の音を作り出すには音の「協調=和」が大事となる、これは、た



図13 製作した版画

だ同時に音を鳴らすということでは生まれない。すなわち、他の人と協調し、調和的ではあるが、自分の内側にしっかりとした芯が生まれ、自信のある音が出ないと他者の音との「協調=和」が生まれれないと言われる。そのために他者の音を体に取り込んで、自分の音を作り出す体験は重要になってくる。また、「基礎打ち込み」も大事である。いくつかのパターンのリズムを、音が「協調=和」となるまで繰り返し、繰り返し、打ち込む。夏休みの練習は友だちと行う「打ち込み」に費やされた。

2-2) 太鼓づくりの知恵を学ぶ

姫路市は、伝統工芸の白革細工に代表されるように皮革加工、製品作りの伝統産業が現在にまで伝えられている。その伝統産業と太鼓との関連性を体験的に学ぶ機会として学校のすぐ側を流れる川の下流にある皮革工場に見学へ行った。

太鼓づくりの実践後2008年2月に実施したアン

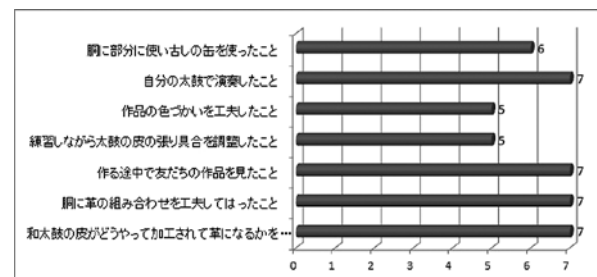


図14 太鼓づくりをして良かったこと (数字は人数：対象人数7名複数回答)

ケート（図14）での「太鼓づくりをして良かったこと」という質問において、演奏したことと共に「和太鼓の加工を見たこと」や「革を貼った」等の和太鼓を製作したことが高評価されていた。このことから、職人の巧みな技を見たり、自らも革と缶詰の容器を組み合わせて和太鼓制作をしたりすることで、今まで道具として扱ってきた太鼓に内在する先人の知恵と技の素晴らしさを再認識するとともに、自分の演奏と皮革産業との関連性を気づいていた。

### 2-3) 音と形の関係について学ぶ

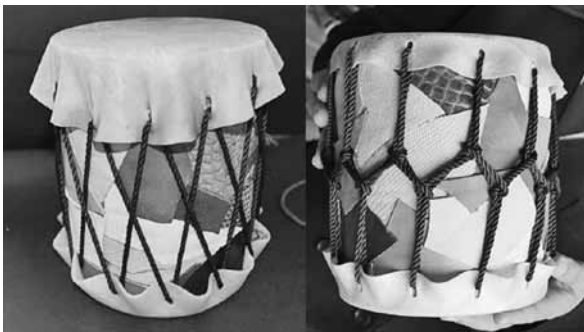


図15 初めの結びと高い音が出る結び

図14のアンケートの項目の「練習しながら太鼓の張り具合を調整した」や、事後感想の「革の張り具合で高い音ができることがわかった」、「紐の結び方を工夫するときれいな模様ができる」の文章が示すように、どのようにヒモを結べば高い澄んだ音ができるのか、児童はいろいろ試行錯誤していた。そして、図15の左右の太鼓の違いが示しように高い音が出る結びの方が造形的にも面白いことに気づいていた。

### 2-4) 伝統産業と環境とのつながりを学ぶ

児童達は、なぜ姫路（播州）地域に皮革産業が栄えたかを調べ以下のようにまとめた。

- ・皮なめしをするのにふさわしい市川・揖保川という穏やかな流水と広い河原があった。
- ・西日本では多くの牛が飼われていたので、原料である牛皮の集荷が容易であった。
- ・瀬戸内海気候の特長として、比較的温暖で雨も少なめの土地であった。天日に干す革晒しに好都合であった。
- ・皮の保存と処理用の塩の入手も容易であった。

以上の皮革産業に恵まれた条件の下、産業は栄えたが清流がその汚水のため全国ワースト上位であったことを知り、児童は以下のような感想もった。

「太鼓の革は、以前、川であらっていたので川を汚していた。でも今は改善されていることから、太鼓はいろんな環境と関係があることがわかった。」

感想の中での太鼓と環境との関係性に関わる言葉が示しているように、何気なく使い、お金を出せば手に簡単に入るように思っていた革が、自分たちの清流の環境とつながり、水を巧みに使った伝統の知恵と努力によって作られていることに気づいていた。

これは、工場見学で多くの水が使われる共に、汚水等の処理がしっかりしてあることを実際に目にしてきたことに基づいていると思われる。

また、廃材を活用した太鼓製作については、事後の感想に「廃材リサイクルをするアイデアが出て、そうすると、きれいな音のでてすごいなと思った。」の述べているように、捨てればゴミになるものを再利用することで、愛着のある太鼓を作れることに気づいていた。

### 2-5) アート（造形活動）の力を学ぶ。

事後の感想の中での概念図においては、7人中5人の物が「アート（造形活動）」という言葉を図の中に入れていた（図16）。

以下はアートを他の要素と結ぶ理由。

- ・太鼓＝音で遊ぶ、楽しむ。かわいく太鼓をつくれる。
- ・廃材＝何かに利用することができる。廃材でアートが楽しくなる。材料の宝庫。いろいろなイメージが浮かぶ。
- ・自分＝いろんな表情にしてくれる。飾り付けをする。とても楽しい、楽しめる
- ・森＝材料がいっぱい。音からアイデアが作れる。

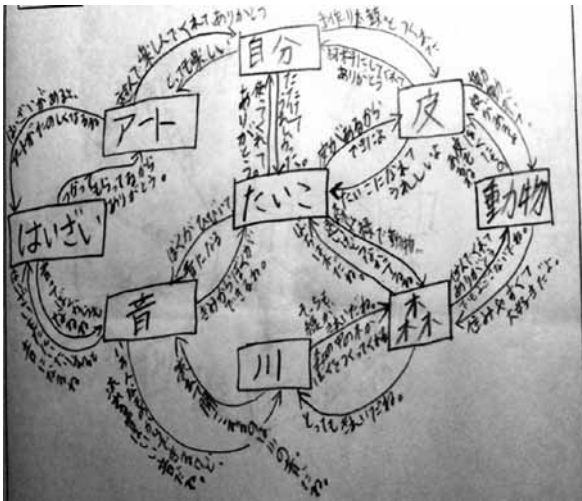


図16 事後概念図

このアートと他要素と結んだ理由から、アートと身近な環境との関わりを見いだすと共に、アートはそれらを活かして、魅力的なものや空間、音を創り出して、自分たちを楽しませる力を持っていることを見いだしたと思われる。

### 5 伝統・文化教育に関わる造形活動の拡張的学習としての可能性についての考察

前節の空き缶和太鼓づくりの活動内容や成果を「相互作用しネットワークする活動システム」の構造図を当てはめた分析、さらに、拡張的学習において活動のきっかけになるとされる「矛盾」や学びを広げる道具になるとされる「スプリングボード」という用語をキーワードに伝統・文化教育に関わる造形活動の拡張的学習としての可能性を考察した。

#### 1) 共創による多様な学習活動の境界の横断

前章の分析から、図17のように伝統・文化教育に関わる造形活動は、地域の革を使ったオリジナルの和太鼓づくりや金鉦山の音を再現した曲づくりを目指して主体的な制作が展開された。児童達は、この学習活動を通して教科・領域、組織の境界を横断した活動を展開したと考えられる。

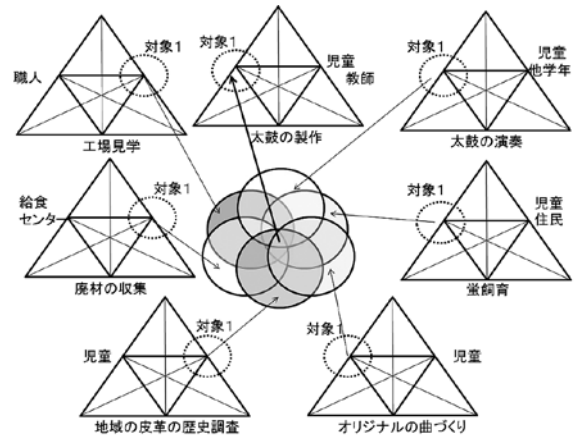


図17 多様な学習活動の横断<sup>27)</sup>

事後に児童が描いた図16等の概念図において、自分と結びつけた要素とその理由を一覧にした表1に整理してみると、和太鼓・曲づくり、そして、その演奏に主体的に参加した児童は、自分と多様な要素とを関連づけ、図17にあるように教科・組織等の境界を横断した学習活動を実現していた。

この境界を横断した要因は何なのか。それは、地域の魅力を表現するための太鼓・曲・演奏という作品＝新しい対象を共創したからと考えられる。

表1 事後概念図の自分と結んだ要素と結んだ理由

自分-川	遊ぶところ	3	きれいで近くにある	1	生きていけない	1
自分-太鼓	楽しくできた	3	いい経験になった	1	頑張った	2
自分-缶	材料	1				
自分-発表会	緊張	1				
自分-もよう	作るの楽しい	1				
自分-先生	太鼓を教えてくれた	1				
自分-工場	見学	1				
自分-皮	皮を張るのが楽しい	1				
自分-革	たたく方	1				
自分-音	いい音出す	1				
自分-廃材	宝物	1				
自分-アート	いろんな表現にしてくれる。	1	飾り付けをする。	1	とても楽しい	1

この共創と教科・学校外組織という枠の束縛の関係について清水博は以下のように述べている。

共創では、我と汝の関係にある人々が互いの間を束縛する関係から開放されて自由な我々となり、互いに他を受け入れながら協力して創造に向かう。<sup>28)</sup>

清水の指摘にあるように個々の主体(児童)が、

オリジナルの空き缶和太鼓を持ち寄り、想いと心一つにして曲を制作し演奏するという共創という過程が、図8の段階の学習者（主体）を拘束＝孤立した学びから解放し、教科や組織等の枠＝境界を横断し、主体の学びを拡張する活動構造になったと思われる。では、この造形活動において学びを拡張するきっかけや推進した道具となったものは何なのか考察を続ける。

## 2) 始点を生んだ「矛盾」

エンゲストロームは拡張的学習における「矛盾」の役割について以下のように定義する。

矛盾は活動システム内部及びシステムとシステムの間が存在し、トラブルが何に由来するのかを理解する鍵となる。<sup>29)</sup>

すなわち「矛盾」が活動理論において学びを拡張的させる変化と発展の源として中心的な役割を果たすとしている。この学習活動の「疑問」の過程で始点となった「矛盾」は以下の3つである。

- ・力強く演奏したい、でも革を破いてしまう。
- ・地域の鉱山後にゴミの不法投棄が続いている、その場所の魅力を発信したい。
- ・太鼓の革を近くの地域で生産されていた、でもそのために過去、自分たちの清流が汚染された。

前節で、児童達が取り組んだ工場見学等で見いだした皮革と環境との関係、鉱山の音を表現した曲、太鼓の仕組みを理解する和太鼓づくり等の多様な共創を生んだ活動は、太鼓演奏活動や教科学習、地域での生活体験等の中で気づいた「矛盾」がその始点の役割を果たしていたと思われる。

## 3) 児童と教師を結びつけた「スプリングボード」

エンゲストロームは、「スプリングボード」について以下のように解説する。

促進的イメージ、技術、ないし社会的－会話的布置であり、ある前の文脈における鋭い葛

藤ないしダブルバインド的な特徴から、新しい拡張的移行的活動の文脈にあやまって置かれたもの、あるいは移植されたものがある。スプリングボードは典型的にはダブルバインド解決における一時的ないし状況的機能しかもたない。<sup>30)</sup>

すなわち、「スプリングボード」は「矛盾」に出会い行き詰まった状態（ダブルバインド）にある時に、見いだしたイメージ、技術、出会いなどであり、それ自体は課題解決へきっかけ＝動機づけを学習者に与える。

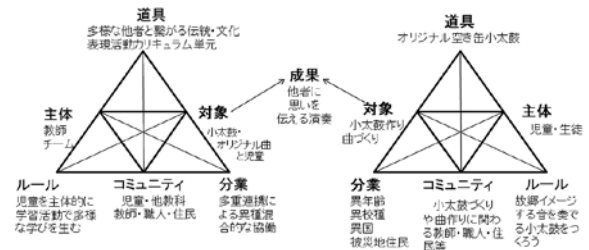


図18 和太鼓づくりで形成された教えることと学ぶことの活動構造

したがって、この学習活動システムを示す図18は、従来の伝統・文化教育に見られる教師による思いつきの趣味的や懐古趣味的な視野狭窄による学習活動のよる「子どもは教師の従属的な存在である」、「学校外の経験や認識と連携していない」というダブルバインドの状況から、下記に示す「スプリングボード」により、教師と学習者とを立場を超えて結びつけ、関心と活動を共有して相互の信頼関係を築きながら主体的に共創の学習を展開できる活動構造となっていたと思われる。

### 3-1) 「独創的なものを作りた・発信したいという願いが生む創造へのイメージ」

清水博が「夢のある明確な目標を共有し、それを実現するための舞台を想定することから変革のイメージが生まれる」<sup>31)</sup>とするように、この学習活動においては、地域の特徴（皮革・清流の水・金鉱山）を取り入れた作品を作りたという願いや、それを発信する和太鼓演奏会という舞台が学びを拡張するイメージを生んでいたと思われる。

そして、そのイメージが「孤立=カプセル化」を解消する活動・連携を生むスプリングボードとなっていたと考えられる。

### 3-2) 工場の職人等や教師・住民との出会い

この学習活動においては、自分たちが演奏する太鼓の革を生み出す革工場の職人や多様な教師等との出会いや共創が、スプリングボードになっていたと思われる。

### 3-3) 個々の想像力を発揮させる表現の自由性

清水博は「現在存在していない未来の舞台(場)を想像することが大切である」<sup>32)</sup>としている。この学習活動においては、オリジナルの太鼓や曲のイメージとそれらを形にする素材や表現技術の選択、太鼓側面の色の配置や演奏する際の個々の動きにおいては、学習者の主体性が重視され、自由に想像力を発揮できる場が確保されていた。その自由性が学習者にとって既習の学びの体験を広げ、地域の特徴をイメージする作品を形にするスプリングボードになっていたと考えられる。

## 6 結語=啐啄同時の教育が拡張する学び

山住勝広は拡張的な学習を総合的な学習等において実現する学習者の姿勢を以下のように述べている。

あたりまえの「対象」に固定され、せまくそれを続けるのではなく、新しい「対象」への拡張を問い、認識やアイデアや提案を交換し学び合うこと。その中から「なぜこのようなやり方を続けているのか」、「なぜ私たちはこうしているのか」、「何を換えようとしているのか」を問うことが総合学習の活動理論的研究実践である。これは「私たちの学校の未来」について学び合うことにほかならない。<sup>33)</sup>

前節の分析と考察で示したように、この伝統・文化教育に関わる造形活動は、児童達の「なぜ=矛盾」を、教師が気づき、それを軸に展開した。したがって、この学習活動も児童の生活体験を「生

きた道具」として学びを拡張させる学習となり、ひいては「私たちの学校の未来」について学び合う場を児童に提供できる可能性を持っていると思われる。

加えて、伝統・文化の芸事の伝承の基本に、師匠=教える側の「時と機の把握」大切さが挙げられている。「啐啄同時の教育」(図19)とも言われていることだが、簡単に言えば、雛が卵の殻を割ろうとする瞬間を見計らって親鳥が卵の殻をつついて穴をあけ、孵化を助けるように、子どもがもう一つ上の段階に伸びようとする瞬間を教師がよく見計らって適切な指導・支援を行うことが大切という意味である。

この姿勢こそ「なぜこのようなやり方を続けているのか」、「なぜ私たちはこうしているのか」、「何を換えようとしているのか」という矛盾を問い、学びを拡張させようとする際の動機づけを強化すると考えられる。

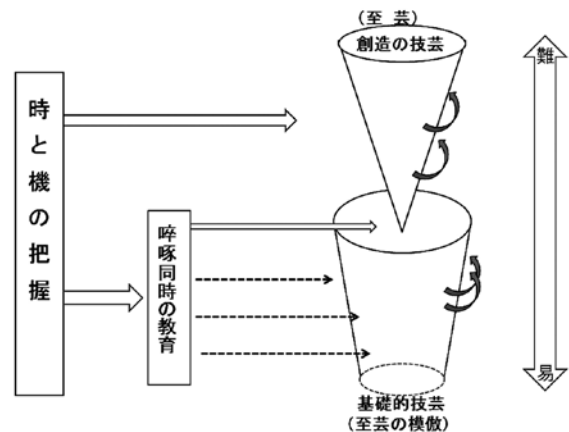


図19 啐啄同時の教育の構造<sup>34)</sup>

現在の学校教育においては、今後の変化の激しいグローバル社会を生き抜くため「知識を基盤とした自立・協働・創造モデルとして生涯学習社会の実現」<sup>35)</sup>につながる新しい学びの挑戦が求められている。

そのために学校には、多様な教科や組織の境界を横断し、他者と協働した共創により子どもの学びを拡張することのできる可能性をもつ伝統・文化教育に関わる造形活動は、拡張的学習の場として役割を果たす可能性も有していると考えられる。

今後は拡張的学習と伝統・文化教育に関わる造形活動の接点をより明確にするため、多様な伝統・文化教育に関わる造形活動がどのような学習システムの構造しているのか、教育的効果を果たすのかについて研究を継続していく。

## 註

- 1) 中央教育審議会教育課程部会 (2007)「教育課程部会におけるこれまでの審議のまとめ」、文部科学省、p.57.
- 2) 姫路市の小中学校で使用されている日本文教出版の教科書を対象にその掲載数を筆者が調査した結果に基づく。以下調査教科書
  - ・日本児童美術研究会、『ずがこうさく1・2上～図画工作5・6下(2002年及び2009年度版)』、日本文教出版。
  - ・花篤實、他(監修)、『美術1～美術2・3下(2009年及び2012年度版)』、日本文教出版。
- 3) 文部科学省、2008、「平成20年度小学校学習指導要領解説 図画工作編」、日本文教出版、p.76.
- 4) 安野功、2009、「伝統・文化に関する教育の動向と課題」『伝統や文化に関する教育の充実—その方策と実践事例—』、教育開発研究所、pp.32-33.
- 5) 安野功、前掲書、p.33.
- 6) 同上
- 7) 同上
- 8) 梶田 亅、2009、「我が国の伝統・文化の教育の潮流」『学校を活性化する伝統・文化の教育』、学事出版、p.36.
- 9) Engeström, Y. 1991, "Non scholesed vitae discimus: Toward overcoming the encapsulation of school learning. Learning and Instruction", An International Journal vol.1, p.256. 日本語訳は「山住勝広、2007、『ハイブリッドな学校システムの開発—拡張的学習からのアプローチ:平成18年度科学研究費補助金(基盤研究B)研究成果報告書』, p.14」の日本語訳を参照。
- 10) ユーリア・エンゲストローム、1999、『拡張による学習—活動理論からのアプローチ—』、新曜社、p.204.
- 11) 山住勝広、2004、『活動理論と教育実践の創造—拡張的学習へ—』、関西大学出版部、p.91.
- 12) 山住勝広、前掲書、p.83. 原図は Engeström, Y. 1987, "Learning by Expanding: an activity-theoretical approach to developmental research" (Helsinki, Orienta-Konsultit), p.78.
- 13) Engeström, Y. 前掲書、pp.83-84.
- 14) ユーリア・エンゲストローム、前掲書『拡張による学習—活動理論からのアプローチ—』、p.79
- 15) 山住勝広、前掲書、p.94.  
この図の原文は、Engeström, Y. 2001, "Expansive learning at work: Toward an activity theoretical reconceptualization" Journal of Education and Work, 2001, p.136
- 16) ユーリア・エンゲストローム、2013、『ネットワークする活動理論—チームから結び目へ—』、新曜社、p.46. 同書の記述を参考に記述。エンゲストロームは、彼の活動システム構造を多元的媒介という特質を持つとしている。
- 17) ユーリア・エンゲストローム、前掲書『拡張による学習—活動理論からのアプローチ』、p.141.
- 18) 山住勝広、前掲書、p.123.
- 19) 山住勝広、前掲書、p.94.  
この図の原文は、Engeström, Y. 前掲書 "Expansive learning at work: Toward an activity theoretical reconceptualization", p.136.
- 20) 同上.
- 21) 山住勝広、前掲書、pp.86-87.
- 22) ユーリア・エンゲストローム、前掲書『拡張による学習—活動理論からのアプローチ—』、p.316.
- 23) 安部崇慶、2008、「我が国における『稽古』の思想と伝統・文化教育」『伝統・文化の教育—新教育基本法・新学習指導要領の精神の具現化を目指して』、人間教育研究協議会、p.36.
- 24) 安部崇慶、前掲書、p.37.
- 25) 安部崇慶、前掲書、p.41.
- 26) ユーリア・エンゲストローム、前掲書『ネットワークする活動理論—チームから結び目へ—』、p.9.
- 27) 山住勝広、2007、「ハイブリッドな学校システムの開発—拡張的学習からのアプローチ:平成18年度科学研究費補助金(基盤研究B)研究成果報告書』、p.22の図2「新しいハイブリッドな活動システムとしてのニュースクール」を参照に筆者が作成。
- 28) 清水博、2003、『場の思想』、東京大学出版社、p.129.
- 29) ユーリア・エンゲストローム、前掲書『ネットワークする活動理論—チームから結び目へ—』、p.8.
- 30) ユーリア・エンゲストローム、前掲書『拡張による学習—活動理論からのアプローチ』、pp.285-286
- 31) 清水博、前掲書、p.193
- 32) 清水博、前掲書、p.66.
- 33) 山住勝広、前掲書『活動理論と教育実践の創造—拡張的学習へ—』、p.173.
- 34) 安部崇慶、前掲書、p.35.
- 35) 文部科学省、2014、『文部科学白書2013』、pp.74-75  
平成25年の文部科学白書では、少子化や高齢化、さらに東日本大震災など直面する危機を乗り越え、我が国の強みも活かしつつ、持続可能で活力ある社会を構築していくための「自立」・「協働」・「創造」という三つの理念の実現に向けた教育行政の方向性として「①社会を生き抜く力の養成②未来への飛躍を実現する人

材の養成等」をあげ、「協働型・双方向型学習など質の高い教育を可能とする環境の構築」を教育現場に求めている。

(函館校教授)